

とより多し、彼是の方言を合せ聞たらんには、多かる中に相似たる事などか無からざらむや、されど天をばアメといひ、虚空をばソラといふ事、の如きものさし云ふ所同じか無からばこそ、舊事紀には天御虚空とも、又大虚空を翔行きて天降るとも、さるる事、の相わけに、其徴の明かなる、空津日高とまると、上代の語には、アメといひ、ソラといふ事、の相わけに、其徴の明かなる、舊事紀、古事記等の書に見えし處、既にかくの如し、天の字を讀て、ラといふは、後世に出し所にて、阿修羅等の説、信するに足べからず。

〔倭訓栞前編十三〕そら。神代紀に虚空の字をよめり、萬葉集に天もよめり、自然の辭なるべし、梵語雜名に、天を翻して素羅といふとも見えたり、神代紀に虚中といへるは、未有方所也と釋せり、

凡そ虚空といへる詞は、泛く天地の間を指といへり、後世唯天の事とのみ心得るは非じ、神代紀に坐於虚天而生兒と見えたるは、天上と中國の道中を指ていへるにや、古事記に天津日高の御子虚空津日高とみえたるは、天子と太子との分ち成べし。

〔萬葉集十冬雜歌〕詠雪

甚多毛、不零雪故、言多毛、天三空者、隱相管。

〔倭訓栞中編一〕あまつそら。天津空と書り、天も空も同じことを重ねていふ、わたつみの如し、つ

は助語也。

〔和漢三才圖會天文〕霄音。按、霄近天氣色也。一日天無雲氣、而青碧者爲霄、天色在五行之外、而青亦非其眞體、莊子所謂天之蒼蒼者、其正色耶、俗傳一天無雲而青、則雨不過二日、是則霄也。

〔日本書紀二十二年〕正月丁亥、置酒宴群卿、是日大臣馬子、上壽歌曰、夜須彌志斯、和餓於朋者、彌能詞句、理摩須阿摩能、椰蘇詞礙異泥、多多須彌蘇、羅烏彌禮磨、豫呂豆余珥、詞句志茂、餓茂、略。

〔萬葉集十秋雜歌〕七夕

從蒼天往來、吾等須良、汝故天漢道、名積而叙來。

〔伊呂波字類抄〕天象。天上天、冬、天、夏天、秋天、幽天同、圓清、天名、蒼岸同、堀鏡同、九根同。

蒼天、春天也、蒼穹同、昊天、夏天也、炎天、已上同、異名也。